
怪しいものではありません。

悠梨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪しいものではありません。

【Z-コード】

Z0976Z

【作者名】

悠梨

【あらすじ】

ある日、若き『魔王』ケイオスは何となく思い立ち、先日出会い友人となつた（「販売員ではありません」参照）『勇者』の息子ルディアス・マクガルディを尋ねて家へ赴く。しかしそこへ偶然帰宅していた『勇者』ルイエ・マクガルディと遭遇してしまい……。

思いつきで行動するものではない、と常々部下のフライスから言われていたが、まさにその通りだなと思った。

背筋に冷たい汗が落ちるのを感じる。せめて満月の夜に来るべきだつたとつくづく思うが、あいにく空は雲ひとつ無い青や。燐々とふりそそぐ太陽に肌がチリチリと焦げ付くのを感じて、もはや暑いのか寒いのかも分からぬ。

それほどまでに混乱している自分を、やや冷静な自分がどこかで見つめて嘲笑してるのを感じる。そらみたことか、所詮自分など魔王などという器ではないのだ、と。

好きで魔王になつたのではない、と自己に返しつつ、かくじつしたものかと頭をめぐらせる。

「……ええと、あのその一、自分、怪しいものでは決して」

「怪しい人ほど、そう言訳するのだよ。自己申告とは、脳みその軽い魔族だね？」

二ヶ所りと効果音つきで微笑みながら、しかしの首筋に突きつけた刃は微動だにしない。

ああーこりや想像以上の手練だねートホホ……などと苦笑を浮かべつつ、相手をそれとなく観察してみる。

ルイエ・マクカルティ。36歳になつたばかりだと部下たちから聞いているが、漂つてくる雰囲気はとてもそんな若造のものでは無い。だからといって老けた風貌なのかといえば、そうでもない。むしろ、ほつそりとした体躯と穏やかそうな顔立ち、背中で一つに束ねている深みのある長い金髪は、実年齢よりも若く見られる。

それらのギャップがまた得体の知れなさを醸し出し、ぶつちやけ魔

族である自分よりもよっぽどバケモノくさい。

「今、ずいぶんと失礼なことを考えなかつたかい？」

「……スイマセンデシタ」

「ごまかすよりは謝つてしまつた方が早い。両手を挙げたままの姿勢で、若き魔王 ケイオスは棒読みした。

それにひとまずは満足したらしいルイエは、一つ頷くと剣は引っ込めずに笑みを深くした。

「さて、それで魔族の王がこんな真昼間に何の用かな？ 私の可愛い息子の生氣でも吸いに来た？」

「人間の生氣なんてマズイものを欲するのは、魔族にすらなれない下等な生命体だよ。

僕の核は世界樹の小枝だから、この世界に充満する負の魔力で十分だ」

それより、どうして僕が魔王だと分かつたのかな？

二ツコリと笑顔を返しながら尋ねると、ルイエは剣をおさめた。おお、意外な展開。あのままズブリと喉首でも裂かれるかと思つたのに。

「キミの魔力の質は、キミの父上によく似てるよ。会つてすぐ分かつた」

父親の話題を出されて、笑みがわずかに引きつるのを感じた。見ていて分かつたのだろう、ルイエが性質の悪い笑みを浮かべる。

「……仇である私が憎いかい？」

「そんなんじやないよ」

隠し通すのは無理だと觀念して苦笑する。そんなんじやない。断じて。

父は『魔族の王』として、決してしてはならぬことをした。だから『勇者』と『魔女』に討たれた。それに関しては何とも思わない。『ただあえて言うなら、僕に魔王だなんて面倒なことを押し付けた

張本人としてイラつとしたかもね」

おどけて肩をすくめてみせると、それが意外だつたのか『勇者』だつた男はクスクスと笑い始めた。

笑いながら、無防備にもくるりとこちらに背中を向けた。

「入りました、家内もちょうど帰つて来ている。紹介しよう」

『勇者』に先導されて『魔王』が連れて行かれた先は、地獄の一丁目 などではなく、至つて普通の客間であつた。

足下にはフカフカとした絨毯。部屋の中央には円卓と揃いの椅子が数脚。円卓の上には花が飾つてあり、品の良い茶器が三人分揃つて並んでいる。

内心どこへ連れて行かれるのか、もしかしたらこちらはその気が無くとも戦うハメになるのでは、ドビクついていたので、かなり拍子抜けしたと同時にホッとした。

円卓の傍には、ティー・ポットを持ったふくよかな女性が立つていて、二コ二コとお茶の準備をしている。

「あらあら、旦那様つたら随分とお綺麗な女性を連れて来られて… ひょっとして、浮気ですか？」

綺麗な女性とは、一体誰のことを指しているのだろう。この場には自分とルイエしかいないというのに。

しかしふと窓ガラスに映つた自分の姿を見て、思い至つた。

根城を出る前に、書庫に立ち寄つたのだ。人間に化けるための資料を探しに。

この間のような白髪の老人では、また教材の販売員など怪しい人物に間違われかねない。

たまたま手に取つた本の華やかな挿絵を参考に化けてみた 確か

本のタイトルは、『灰かぶり姫』……だつたかと思う。

魔族に性別の概念が無いわけでは無い。ただその挿絵の人物が人間の女性であると、人間のことに疎いケイオスには判別できなかつただけで。

「ふううん、浮氣ねえ。ルイエつたら、中々度胸あるんじやないの

突然背中に強い殺氣と悪寒を感じ、ケイオスは思わず頭の中で反撃の魔法陣を編みながら振り向いた。

にこやかな女が立っている（ただし田は笑っていない）。右手には何やら乗せた盆を、左手は『勇者』の肩に指をギリギリと食い込ませ。

『勇者』はそれらを物ともせず、涼しい顔で女に向き直つて微笑むと、盆を受け取つた。

「ルカ、違うよ。分かってるんだろう、彼は」

「はいはい、『魔王』サマでしょ。よーこそ、こんな何も無い所へお招きした覚えは無いけどね。冷ややかな笑顔が、いつそう温度を下げたのはケイオスの氣のせい……だと思いたい。

後ずさりたい衝動を堪えつつ、無理矢理顔の筋肉を動かして笑顔を作る。ひきつっているだろうが、そのくらいは見逃して欲しい。

「えーとえーと……ハジメマシテ、コンニチハ、『魔女』……サマ？」

「氷漬けにされたいの、若造」

びしりと空氣が音を立てた（よつな氣がした）。

「だめだよ『魔王』、彼女を『魔女』と呼んでは」

昔それで、私も氷漬けにされかかったことがあるんだ。

『勇者』が親切心だろうか、ひそりと耳打ちをしてくる。だがそういうことは、地雷を踏んでからではなく先に言つておいてもらいたいものである。即座にスミマセンデシタと謝罪するが、凍てついた空気が緩む気配は一向に無い。

結局、そんなやり取りを全くスルーしながらお茶の準備をしていた使用人の女性が

「さあさ、お茶が入りましたよー。冷める前にビーブル」と間延びした声を上げることで事態は動き出した。

ケイオスが内心密かにこの女性に感謝と尊敬の意を抱いたのは言つまでも無い。

焼きたてのアップルパイに、たっぷりの生クリーム、摘み立てのハーブを添えて。

それに良い茶葉を使った紅茶が、マクガルディ家におけるティータイムの定番だ。

いつもはこの円卓に家庭教師のケツヘルとルディアスが着くのだが、あいにくと今日は屋外で植物に関する授業をするために一人揃つて外出している。

しかも普段は居ない『勇者』夫妻が珍しく帰宅していて、ケイオスはタイヘン間の悪い時に来てしまったことを後悔した。

確かにいつかは『挨拶』に来るつもりだったが、こんなに急なことでは心の準備とか、全然出来ていない。

「で、『魔王』さまは一体何の用で來たのよ。息子の生氣でも吸いに來た？ それとも父親の仇討ち？」

「『魔王』でなくケイオスと呼んで欲しいな。あと僕は魔族だから人間の生氣なんて必要ないし、仇討ちのつもりも無いよ。父が貴方たちに討たれたのは、自業自得だから」

夫婦揃つて発想は同じなんだな、と思いつつ、アップルパイをつきながら答えた。

サクサクのパイ生地に、酸味のある爽やかなリングのコンポートと生クリームが絶妙のバランスだ。美味しい。

「ただちょっと、ルディアスと話がしたくて」

「ルディアスと？」

「そ。この間偶然この家に来て、友達になつたんだ」

あのときだつて、別に『勇者』と『魔女』の息子を狙つてきたわけではない。そう説明すると、勇者夫妻は顔を見合せた。

「『魔王』 ケイオスって言つたかしら。貴方、変な魔族なのね」

「貴方たちほどでは無いよ。『魔王』相手に平然とお茶を振舞うん

だからね。まじやなくてええと、ルカ?」

「あら、物覚えは悪くないのね」

紅茶のカップを傾けながら、ルカはニッコリと笑った。先ほどよりは棘が無い、が裏を感じる。

「ところでケイオス」

「何?」

「貴方、このお茶や食べ物に毒が仕込まれてるとは考え付かなかつた?」

家庭教師のケツヘルから見たルディアス・マクガルディといつ少年は、年の割にはやや聰明なところのある、極めて普通の子供であった。

特別な両親を持つ割には、容姿においても能力においても、これといつて特別なところなど見受けられない。

頭が悪いわけではない。授業への反応も良く、愛想も良く、礼儀正しい。まるで兄のように自分を慕つて着いてくる姿は微笑ましく、いわゆるお気に入りの生徒といつやつだ。

採集した植物を、毒のあるもの・無いもの、薬になるもの・薬になるが使用法や加工法を間違えると毒になるもの、とても美味しいもの、とてもじゃないがえたモンじゃないモノ、などに分類しつつ説明してやる。

その中でも彼は「薬になるもの」に興味があるらしい。くじくじとした縁がかった青い瞳を輝かせながら、ノートを熱心に取りつつ質問を投げかけてくる。

「ルディは医者か薬師にでもなりたいの？」

「ううん、違うよ」

「でもさつきから薬草にばかり興味を示してるじゃないか？」

問われて、うーんと唸りながらルディアスはノートから顔を上げた。手にしたペンでポリポリと頭を書きながら、何かを考えている。

「今パパとママが帰ってるから、もしかしたら解毒剤か、傷の治療が出来るものが必要になるかなーと思つて」

「はあ？」

思わず変な声が漏れた。両親の帰宅と薬草の必要性の間にある繋がりが、全く分からぬ。

だがまあ、お手製の研究ノートを覗き込む子供の顔は年相応に可愛

らしく、楽しそうなので良しとしよう。

無理矢理結論付けると、ケツヘルはふと空を見上げた。

「おつと。そろそろ雲行きも怪しくなってきたし、帰ろうか?」

「……ケツヘルさん、また彼女とデートの約束でもしたの?」

「まあそれもあるけどねー。さあさあ、雨降る前に帰るわ」

濡れて風邪でも引いたら、今晚のデートは台無しである。

今の彼女とは真剣に交際していて、結婚も考えているのだ。いずれはルディアスにも紹介してあげたいと思っている。この子供な、きっと弟のように祝福してくれるだろう。

別に考え方なかつたわけでは無い。もしかしたら、そのくらいのことはあるだろ?と思つていた。

だが無意味なことなので、確認するのをスルーした。なぜなら自分には毒など効きはしない。何せ世界樹の小枝が核の『魔王』なのだから。

さてどう返答したものかと思いつつ、とりあえず

「……がはあつ!」

胸を押さえ、吐血するフリをして倒れてみる。お約束である。

キックカリ5秒後にむくつと起き上がりて見せると、勇者夫妻は何事も無かつたかのように茶をすすっている。

「……ノリのいい『魔王』ね」

「そりやどうも」

『ソジ』と席に着きなおして、お茶の続きを再開する。

「で、実際のところ入つてたの、毒」

「いいえ、入れてないわ」

「それは良かつた」

心の底から安堵しつつ、少し冷めた紅茶をすする。

確かに自分には毒が効かない。だが、毒が入つていたということは、

『勇者』夫妻が『魔王』である自分に敵意を抱いていふといふことになる。

それはつまり、人間側から魔族への宣戦布告であるといふことだ。

だからこそ、もし毒が混入されていても見過さずつもりでいた。が、自己申告されてしまえばそれはもう無視することは出来ない。

「ハラハラするから、そういうタチの悪い冗談は辞めて欲しいなあ」「私たちだって、それほど愚かでは無いつもりだよ。自分たちの立場くらいは分かっているさ」

最後の一口を飲み終えた『勇者』がまつたりと言つ。カップを皿に戻した次の瞬間には、その穏やかな表情は消えていた。

「さて、取引といふうか、『魔王』。キミもルティアスを尋ねて來たといふことは、いづれはそのつもりだつたんだろう?」

そんなつもりではなかった。誓つたつていい。今日ルディアスを訪ねたのは、ただの思いつきであり、気が向いたからとだけ。本音を言えば、少しでも勇者夫妻がどんな人物たちなのかをルディアス自身から聞き出したいというのもあったが。彼らと遭遇するのはまだまだ先のつもりでいたし。

取引？ 誰が、誰と、何を？？

「……えーと」

困惑しているのが、全て表情に出ていたらしい。

「あなた、まさか」

何も考えずに来たんじゃ、無いわよね？

ルカが、ひくつと左頬を引き攣らせる。隣に立つルイエが、吹き出していた。

「うん。ていうか何を取引したらいい？ ルディアス関係あるの？」 分かるふりして虚勢を張ったところで、得られるものは何も無い。ひとまず正直に尋ねてみると、ぶふつと音がして、いよいよルイエが本気で笑い出した。ルカは額を押さえてため息を吐いていた。「貴方の部下の苦労が分かるような気がするわ。つたぐ、このバカ息子は『魔王』の自覚があんのかしら」

「ああそれ、よくフライスに言われるよ」

苦笑いで答えると、『魔女』は隣で腹を抱えて笑っている『勇者』の腹に肘を打ち込んだ。ごすつ。中々重たげな音がした、よつな。『勇者』はあまり痛そうな表情では無いが、ひとまずは笑い止んだらしい。こほん、と一つ咳払いして表情を引き締める。

「では改めて『魔王』ケイオスに、『勇者』ルイエと『魔女』ルカから、取引を申し込む」

「ぐく。思わず唾を飲み込んだ。何を言こ出されるのだろう。無理

難題で無ければ良いのだが。

「ルディアスは、人間とエルフ両方の血を引いている、いわゆる新しい『第四の種族』だ。きっと今後は増えていくと思う。そのうち、人と魔族の子である『第五の種族』、魔族とエルフの子である『第六の種族』も表れるかも知れないね」

そつとルカの肩に手をかけ、しかしさりげなく払いのけられながら『勇者』が言う。

恨みがましく『魔女』に目を向けると「暑苦しい」などとあしらわれ、少し凹んだようだつた。この夫婦の力関係が分かつた気がする。

「そして同時に、彼は『勇者』と『魔女』の子でもある」なるほど、そういうことか。

先代魔王を倒された『魔族』たちにとつて、彼は憎しみの象徴になる。

……しかし彼に手を出すといつことは、現状では『魔族』から『人間』と『エルフ』双方への宣戦布告ということになる。『第四の種族』といつても、まだそれが種として地に定着するか分からぬ以上、彼の存在は人でもありエルフでもあると考えられるから。

人は、『魔族』を忌み嫌い、出来れば殲滅したいと望んでいる。

『魔族』もまた、理解できぬ『人』という種族を排他し生きていくたいと望んでいる。

両者の均衡は非常にもろく、危ういものだ。些細な切欠さえあれば崩れる。

そして『エルフ』は、本来は中立の立場にある存在だ。

『人』と『魔族』のどちらか・あるいは双方が誤った方へ動き出したときに、それを正すために。

「 分かったよ、ルイエ、ルカ。僕は彼を他の『魔族』たちから必ず守り通そう。約束する」

「ありがとう、助かるよ」

「そしてその代償は、本来ならルティアス自身が支払わなければならんだけど、彼はまだ子供だ。だから」

「代わりに私は『魔女』として、『魔族』の種としての進化を導くように世界に満ちる魔力の調整と管理をし続ける……これでいい?」

「十分だ」

そんじや取引成立ね、と笑った『魔女』の顔は裏も棘も無い笑顔だつた。

隣に立っているルイ工は相変わらず肩に手を乗せよつとして、振り扱われている。

どうせ守るなら、可愛い女の子が良かつたなあ……とか思ったのは、内緒である。

余談であるが、ルティアスが屋外授業で採集して持ち帰った薬草は後日、大変役に立つことになつたのだが

それはまた、別のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0976n/>

怪しいものではありません。

2011年2月17日18時36分発行